

Arthuriana Japonica: Newsletter No. 25

December 2012

国際アーサー王学会日本支部会報

Société Internationale Arthurienne Section Japonaise

目次

I. 2011 年度年次大会報告	1
年次大会プログラム	1
総会議事録	2
大会発表要旨	3
野口俊一先生追悼シンポジウム発表要旨	4
II. 新役員について	5
III. 追悼	5
IV. 2012 年度年次大会のお知らせ	6
V. 会計からのお願い	7
VI. 会員名簿に関するお願い	7
VII. 研究発表・シンポジウム企画募集	7
VIII. 文献情報	7
英文学	7
独文学	8
仏文学	9
イタリア、スペイン、カタルーニャ文学	10
中世ラテン文学	11
ケルト文学	11
その他	11

I. 2011 年度年次大会報告

日本支部の 2011 年度年次大会は、下記の通り滞りなく開催されました。ご参加いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

[日時] 2011 年 12 月 17 日 (土) 午後 0 時 45 分より

[場所] 中央大学駿河台記念館 280 号室

[大会費] 1,000 円 (学生無料)

[懇親会費] 6,000 円 (学生 4,000 円)

年次大会プログラム

*開会(12:45)

開会の辞 支部長 高宮利行 (慶應義塾大学名誉教授)

*第 1 部 国際アーサー王学会ブリストル大会発表報告(12:50-14:10)

(司会) 高橋勇 (慶應義塾大学)

『メリアドール』と「文化移転」の主題 佐佐木茂美 (明星大学名誉教授)

「“not semly” (SGGK, 348): Sir Gawain and the Green Knight における英雄像の〈転身譜〉」
河崎征俊 (駒澤大学)

「La figure du chasseur dans Guillaume d'An-gleterre et les romans de Chrétien de Troyes」小沼義雄 (埼玉県立大学非常勤講師)

*第 2 部 研究発表(14:10-15:30)

(司会) 高宮利行

「ウェールズ文学におけるゴーヴァン像--Gwalchmai」Natalia Petrovskaia (ケンブリッジ大学博士課程)

「Saga af Tristram ok Ísodd 再考」林邦彦 (尚美学園大学非常勤講師)

*第 3 部 野口俊一先生追悼シンポジウム「マロリーとその伝統」(15:50-17:10)

「マロリーとピーター・ヘイリン—16 世紀のアーサー王物語受容の一断面」高宮利行 (兼・司会)

「故野口先生の仕事を辿る—マロリーのテキストに残された書き込みを読む」向井毅 (福岡女子大学)

『編集者』ジョセフ・ヘイズルウッド—19 世紀におけるトマス・マロリー 『アーサーの死』の出版事情— 不破有理 (慶應義塾大学)

「MS HM 136 and Caxton's 1480 Edition: Possible Textual Development of the Chronicles of England」高木眞佐子 (杏林大学)

*支部総会(17:20-17:50)

(議長) 高宮利行

*懇親会(18:00 より)

(場所: 駿河台記念館 1F ポンスフ)

2011 年度大会も、会員・非会員の皆さまに多数ご参加・ご協力により、無事に開催することができました。物心両面に渡るあたたかい応援を下さったみなさまには、心より御礼申し上げます。特

に今大会は、中央大学人文科学研究所との共催ということで、力強いサポートをいただきました。同大学の渡邊浩司先生、並びに惜しくも本年急逝なさいました福井千春先生には、感謝の言葉もございません。また受付業務も、中央大学の学生さんにご協力いただきましたことをここに記し、感謝の意を表します。懇親会も、盛会のうちに終了することができました。ご参加・ご協力いただいた皆さま、ありがとうございました。

(事務局)

総会議事録

* 報告事項

(1) 2011 年度の活動について

Bibliographical Bulletin の発行が遅れたことによる送付遅延について報告があった。これにともない大会お知らせ発送、会報・名簿発送も遅れることとなった。Bulletin はまず大会参加会員に現地で配布され、欠席者には後日郵送することとされた。

(2) ブリストル大会の報告

2011 年 7 月 25 日より 30 日まで、イギリス・ブリストル大学でアーサー王学会の国際大会が開かれた。大会の様子・日本からの参加者の活動などについて報告が行われた。

(3) 支部長（会長）選挙について

高宮支部長の任期満了に伴う新日本支部長選挙の結果が発表された。総投票数 31 票のうち細川哲士氏（仏文学；立教大学名誉教授）が過半数の 16 票を獲得し、次期支部長に選出された。任期は 2012 年 1 月 1 日から 2014 年 12 月 31 日。

上記の報告を受けて次期支部長より挨拶が行われた。引き続き副支部長や事務局長など、主な次期役員会メンバーについての報告が行われた。

(4) 書誌担当からのお願いと報告

Bulletin とニューズレターに掲載される書誌の編集方針の違いについてあらためて説明があった。前者はアーサー王伝説もしくは中世文学に関連する会員業績に限り、後者は会員のその他業績および広くアーサー王伝説関連の出版物に掲載する。

また Bulletin に掲載される梗概の長さは上限が 50 語である旨、寄稿者に注意を呼びかけた。また掲載にあたっては、できるかぎり執筆者本人から書誌担当者に献本や抜き刷り送付をお願いしたい旨が強調された。

(6) 退会希望者報告

下楠周子

協議事項

(1) 2011 年度決算報告

幹事（会計）より 2011 年度の会計収支決算報告が報告され会員の承認を受けた。

* 収入

項目	収入金額
大会費	47,000
展示量	20,000
懇親会会費	149,000
会費	174,000
入会金	6,000
寄付金	10,000
利子	180
学会誌代	2,000
小計	408,180
2010 年度からの繰越金	362,607
計	770,787

* 支出

項目	支出金額
懇親会費用	15,000
大会アルバイト料	20,000
本部への学会誌支払い *	269,475
郵便局振込手数料	5,000
事務・雑費・郵便費	70,138
学会誌配布費	0
会場費	0
小計	514,613
2012 年度への繰越金	256,174
計	770,787

*2010 年度分の学会誌代請求書が当該年度内に到着しなかったため、2011 年度において 2 年分の学会誌代を本部に送付した。

(2) 学会ウェブサイトの移転及びそれに伴う支出について

従来本学会のウェブサイトは、国立情報学研究所のサーバ及びドメインを借用して運営されていた

た。しかしながら昨年度総会でも報告したように、諸般の事情により当該サービスは平成 24 年 3 月をもって終了する。これに伴い、役員会は外部レンタルサーバを有償借用し、有償の独自ドメインを取得してサイトを移設することを提案した。レンタルサーバとしてはロリポップ！を利用する予定であること、独自ドメインは既に取得済みであることが報告され、了承された。また、ウェブ・デザインに無償で協力をいただいた石橋宗親氏に対し、謝礼を出すことが提案され、了承された。

(3) 2012 年度予算案提出

(2) の審議を受けて、2012 年度予算案が提出された。2011 年度への繰越金、2013 年度への繰越金の金額についての訂正が会計監査役から提案され、訂正案が会員の承認を受けた。

* 収入

項目	収入金額
懇親会会費	160,000
大会費	35,000
会費	200,000
入会金	9,000
展示料	20,000
小計	424,000
2011 年度からの繰越金	256,174
計	680,174

* 支出

項目	収入金額
懇親会費	160,000
大会経費・アルパイト料	10,000
本部への学会誌代支払	150,000
銀行手数料	2,500
事務・雑費・郵便費	40,000
学会誌配布費	35,000
会場費	10,000
ドメイン名取得・維持費	2,980
サーバレンタル初期費用	1,575
サーバレンタル費	3,150
ウェブ構築謝礼	50,000
小計	465,205
2013 年度への繰越金	214,969
計	680,174

(4) 入会希望者の紹介と承認

以下 2 名の新規入会希望者が紹介され、入会が承認された。

伊藤亮平氏 (推薦者: 渡邊徳明・高橋勇)

田辺めぐみ氏 (推薦者: 篠田勝英・小沼義雄)

大会研究発表要旨

① 「ウェールズ文学におけるゴーヴァン像—

Gwalchmai] The Figure of Gawain in Medieval Welsh Literature: Gwalchmai

Natalia Petrovskaia

Gawain is one of the most famous knights of the Arthurian legend and features in most of the medieval Arthurian romances. In medieval Welsh literature, under the name of Gwalchmai, this character appears in all six of the surviving medieval tales concerning Arthur. Five of these tales are usually printed together in the collection known under the modern title *Mabinogion*.¹ These texts are *Culhwch ac Olwen* ‘Culhwch and Olwen’, *Breudwyd Rhonabwy* ‘The Dream of Ronabwy’, *Ystoria Gereint vab Erbin* ‘The Story of Gereint son of Erbin’, *Chwedl Iarlles y Ffynnon* ‘The Tale of the Lady of the Fountain’, and *Historia Peredur fab Efwrawc* ‘History of Peredur son of Efrog’. To these should be added the *Ystoria Tristan* ‘Story of Tristan’, which survives in fragments only.

The status of the character within the Arthurian court is a matter of particular interest. As the king’s nephew, according to Welsh law Gwalchmai could be either the king’s heir (known as *edling*), or the chieftain of the king’s warband (known as *penteulu*). It is therefore particularly striking that Gwalchmai’s status in Arthur’s court does not appear to be the same in all of the texts. For the purposes of the study of Gwalchmai’s status in the court, the first two texts can be dismissed since they do no more than name him. My research on the subject of Gwalchmai’s status in the remaining four texts has yielded the following results: while in *Gereint* and *Ystoria Tristan* is clearly fulfilling the function of *penteulu* (and indeed is called that in *Gereint*), in *Owein* he appears to be *edling*, while the eponymous hero of the tale, Owain, becomes Arthur’s *penteulu*.² Finally, the tale of *Peredur* poses an

¹ The most recent translation is S. Davies, trans., *The Mabinogion* (Oxford, 2007).

² For an early version of my arguments on this subject, see ‘*Edling or Penteulu? Ambiguities in the Status of Gwalchmai*,

interesting problem. Due to differences between the versions of this text preserved in the different manuscripts, it seems to belong to both traditions. In the text preserved in Aberystwyth, National Library of Wales manuscripts Peniarth 7 and 14, Gwalchmai is *penteulu*, while the versions preserved in the Red Book of Hergest (Oxford, Jesus College 111) and the White Book of Rhydderch (Aberystwyth, National Library of Wales Peniarth 4 and 5) depict him, as in *Owein*, as *edling*. It thus appears that there are two separate traditions concerning Gwalchmai, Arthur's nephew, surviving in medieval Welsh literature: one depicts him as Arthur's heir, the *edling*, while the other depicts him as the chief of Arthur's warband, *penteulu*.

② 「*Saga af Tristram ok Ísodd* 再考」

林邦彦
過去に北歐における「トリスタン伝説」に題材を取った作品として最も重要視されてきたのは、1226年にノルウェー王 Hákon Hákonarson の命で修道士 Robert によりノルウェー語で書かれ、後にアイスランド語に翻案されたと考えられてきた *Tristrams saga ok Ísondar* と呼ばれる作品であろう。この作品は、現在では断片でしか残されていない Thomas of Britain の作品が原典で、宮廷本系のトリスタン物語の内容を完全な形で伝えるものと考えられているが、これとは別の、恐らく 14 世紀にアイスランドで著されたものと考えられている *Saga af Tristram ok Ísodd* と呼ばれる作品は、*Tristrams saga ok Ísondar* と比べ、分量は大幅に少なく、物語内容は様々な点で大幅に異なっており、過去には *Tristrams saga ok Ísondar* の parody であるとの解釈がなされる一方、*Tristrams saga ok Ísondar* との相違点について、流布本系作品の影響を指摘する研究者もあった。しかし、*Saga af Tristram ok Ísodd* の主要登場人物である Tristram、Mórodd 王、Ísodd の作品中の言動を各々 *Tristrams saga ok Ísondar* における該当人物である Tristram、Markis 王、Ísodd の場合と比較すると、*Saga af Tristram ok Ísodd* では Tristram と Mórodd 王についてはいずれも、その言動は、特に Ísodd を巡って、より相手の望みが叶いやすくなるものとなっており、互いの関係がより悪化しないよう、より良好な状態に保たれるよう描かれ、Ísodd については、

Nephew of Arthur', *Quaestio Insularis* 8 (2007), pp. 113–128.

身内を奪われた怒りや悲しみを忘れ、殺人者の Tristram を赦すに至る過程が早まり、また、奴隷を使つての侍女 Bríngven 殺害未遂を巡る身勝手な言動が改変されている。これら *Tristrams saga ok Ísondar* との人物像の相違は parody との印象は与えず、流布本系作品からの借用でもない。これらは同時期にフランス語作品など、外国語の原典からアイスランド語にまで翻案された作品群をもとにアイスランドで独自に生み出された騎士物語作品群の担い手たちの意識の反映だと考えられよう。

野口俊一先生追悼シンポジウム発表要旨

① 「マロリーとピーター・ヘイリン——16 世紀のアーサー王物語受容の一断面」

高宮利行
ブリストルの国際アーサー王学会の国際委員会では、英国支部の会員だった野口俊一先生が 2011 年に逝去されたことが報告され、学会の総会でも報告された。私は東日本大震災が起きた 3 月 11 日午前、大和郡山市の病院で闘病生活を送っていた野口先生をお見舞いしたが、その時は思いのほかお元気で、マロリー研究について語り、ブリストルでの学会に思いをはせておられた。それだけに、向井氏から一報が入った先生の死に衝撃を受けた。

私はブリストル学会で、17 世紀の宗教人 Peter Heylyn が地理学書 *Microcosmus*, 2nd edition (1625) の中でマロリーの作品へ言及したと考えられる箇所に関して発表した。この 17 世紀における 3 例目のマロリー言及は、*The Medieval Python: the Purposive and Provocative Work of Terry Jones* (New York: Palgrave, 2012), pp. 229-239 に、'Macbeth and Malory in the 1625 Edition of Peter Heylyn's *Microcosmus*: A Nearly Unfortunate Tale' として出版された。

② 「故野口先生の仕事を辿る——マロリーのテキストに残された書き込みを読む」

向井毅
後掲

③ 「『編集者』ジョセフ・ヘイズルウッド ——19 世紀におけるトマス・マロリー 『アーサーの死』の出版事情——」

不破有理
ウィリアム・キャクストンによって 1485 年に初

めて印行されて以来、トマス・マロリーの『アーサーの死』は 1634 年まで 6 回刊行された。しかしそれ以降 200 年近くマロリーのテキストが出版されることはなかった。1816 年に奇しくもほぼ同時期に異なる出版社から刊行された 2 種類のテキスト Walker and Edwards 版と R. Wilks 版を取り上げ、とくに第 3 巻の比較によって R. Wilks 版の再評価を試みた。句読点の変更による読みの変化が人物描写にも影響を与えていること、さらに単なる植字工レベルの変更ではない語彙の選択的変更があることが判明した。R. Wilks 版の編者である Joseph Haslewood が従来考えられている以上に編者として関与していた可能性を指摘するとともに、ライバル出版社に先を越された悔しさが吐露された比較広告を紹介しながら、18 世紀から 19 世紀の中世復興とアーサー王伝説の出版事情、読者層の違いによる書籍の判型の相違を指摘した。(本研究にもとづき 1816 年両版と 1817 年は出版準備中。)

④ 「MS HM 136 and Caxton's 1480 Edition: Possible Textual Development of the Chronicles of England」

高木眞佐子

本発表では、2011 年 7 月の国際アーサー王学会ブリストル大会で、E.D. ケネディ教授の退官を記念するシンポジウムが行われた際、光栄にも私がパネリストとして発表させていただいた内容を紹介した。主旨は、これまでキャクストンの底本からのコピーではないかと疑われてきた、ロンドン・大英図書館所蔵の BL Additional 10099 写本よりも、サン・マリノ、ハンティントン図書館所蔵の HM 136 写本の方がキャクストン版に近く、新しく発見された HM 136 写本上に附した印刷用の印(ページ幅確定のために用いられたと考えられている)と照らし合わせても、HM 136 写本がキャクストン版の底本そのものだと思われる、というものであった。さらに BL Additional 10099 写本にはキャクストン版には見られない異同が幾つもあり、その異同のいくつかはキャクストン版の印刷本を底本にして書写された、いわゆる「印刷機出現以降」の写本であるがゆえにもたらされた可能性も指摘した。HM 136 写本がキャクストン版の印刷用手稿であることは複数の証拠から疑う余地は少ないとみられ、今後本文校訂を経て、*Chronicles of England* の写本が印刷本になるまでに

写本群がどのような派生をたどったかがより明確になること、そして印刷本を底本として作成された *Chronicles of England* 写本の特定も一層進むことは確実とみられる。

II. 新役員について

上記のとおり 2011 年度支部総会において任命された細川新支部長の指名により決定した 2012 年～2014 年の幹事会新役員は以下の通りです。

会長(日本支部支部長)：細川哲士

副会長：不破有理(英文学；慶應義塾大学)

幹事(庶務)・事務局長：嶋崎陽一(仏文学；龍谷大学)

幹事(会計)：渡邊徳明(独文学；日本大学)

幹事(書誌)・仏文学担当書誌：小沼義雄(埼玉県立大学非常勤講師)

英文学担当書誌：小宮真樹子(同志社大学・近畿大学非常勤講師)

独文学担当書誌：林邦彦(尚美学園大学非常勤講師)

なお、独文学担当書誌は当初渡邊徳明が兼務となっていたところ、2012 年 3 月より新たに林邦彦が任命された。

III. 追悼

① 野口俊一先生を悼む

向井毅

「リチャード・ライトの版とスキート版チャーサーの違いは何でしょうか。」ロンドン滞在中の私は、ブルームズベリにある常宿に先生を訪ねた。二言三言あいさつを交わし、ガワー・ストリートを歩き出すなり、「何」に強勢を置く、この質問を受けた。前触れなく問題の核心に入る、この途方もなさ(‘exorbitance’)は、いつでもどこでも見せる先生の自然な問いかけである。聞く者を緊張させ、考えさせ、時に悩ませ、そして啓示に導く、先生の対話は今はもう叶わない。

先生は、昨夏(2011 年 7 月 17 日)、帰らぬ人となった。3 月 24 日には、天王寺の研究室で学んだ者たちが集まり、78 歳の誕生日を入院先の病室で祝ったばかりであった。折々に勉強会を持った、佐渡、富山、大山、高野山、長崎などのことを懐かしく話題にしながら、「故郷」や「仰げば尊し」の唱歌を歌い、「森のクマさん」を輪唱した。先

生は終始穏やかで、時々子供のような表情を浮かべられた。広島大学時代のこと、山本忠雄博士をロンドンに案内されたこと、ブリティッシュ・カウンセル奨学生としてヴィナーヴァー教授とブルーワー教授から教えを受けたこと、ウィンチェスター・コレッジでの写本調査のこと、慶應の厨川文雄博士の学問への姿勢、高宮利行教授が果たす国際貢献のことなど、尽きることなく話が続いた。今回は、奈良ホテルの庭で「園遊会」を持つことを約束し、疑うことなく私たちはその場を辞した。

先生の学問姿勢に揺らぎはなかった。原典テキストと向き合う研究である。残された『マロリー作品集』への書き込みを観察すれば、先生の関心は、1964-65年の留学を経て、文法的問題から本文異同へと移り、以後一貫して第一次資料を調査対象とし、本文校訂の問題に取り組み、成果を英語で発表された。当時の英語英文学の世界では、本文生成を扱う研究は珍しかった。中高教員の養成を目指す教育大学の演習の場に、馴染みのない批評用語とともに、この「途方もない」研究のあり方を紹介された学生の評価と態度は二分し、一部の者が先生の世界に憧れ、酔い、いつの間にか研究の世界に誘われることとなった。導いた世界は、アーサー王文学と中世英語研究にとどまらない。ディケンズ、ジョイス、シェイクスピア、コールリッジなど、学生の関心に徹底して寄り添い、時間を惜しまれなかった。機会あるごとに、所蔵先図書館で原典（マニュスクリプト）を見ることを勧められた。先生の口癖は、「精読」と「オリジナルな研究」であった。

先生はマロリーのアーサー王文学を中心に、国の内外で研究発表を行い、多くの論文を国際誌等に発表された。それらは書物の形で手に取れないのは残念ではあるが、60歳の還暦記念に2冊のフェストシュリフトが英国と日本から出版された。ここに示された祝意こそが先生の最大の喜びであった。先生の学恩に感謝を表し、合掌。（高宮利行教授による追悼文「頑固一徹の侍—野口俊一先生を偲んで—」は、雄松堂書店の連載コラムにあり。）

②福井千春先生追悼

(役員会)

国際アーサー王学会日本支部のために多大なる尽力をいただいた福井千春先生（中央大学経済学部教授）が2012年4月26日（木）に逝去されました。享年58歳。

福井先生は中世スペイン文学を研究対象とし、なかでも中世スペインの叙事詩『わがシッドの歌』に関心を寄せられ、牛島信明氏とともに邦訳を1994年に国書刊行会から刊行されました。中央大学人文科学研究所では「剣と愛と—中世ロマニアの文学」および「英雄詩とは何か」という研究チームを主宰され、中央大学出版部から3冊の編著書を刊行しておられます。社交的で人脈の広がった福井先生は学際的な立場から、本邦での中世ヨーロッパ研究をリードしてこられました。

ここにご冥福をお祈りするとともに、謹んでお知らせ致します。

IV. 2012年度年次大会のお知らせ

〔日時〕2012年12月15日13時15分より

〔場所〕中央大学多摩キャンパス2号館4階研究所会議室4

〔プログラム〕

第1部：研究発表

「消極的な求婚者—アイスランドのbridal-quest romanceから—」林邦彦（尚美学園大学非常勤講師）

「ミンネザングにおけるアーサー王物語」伊藤亮平（松山大学非常勤講師）

「白鹿、ハイタカ、角笛—クレチアン・ド・トロワ『エレックとエニード』における狩猟の言説—」小沼義雄（埼玉県立大学非常勤講師）

第2部：特別講演

「宮沢賢治と中世フランス文学—虚構の問題—」天澤退二郎（明治学院大学名誉教授）

支部総会

17:30 懇親会 於：フラット（ヒルトップ2F）

〔大会費〕1,000円（会員のみ／学生無料）

〔懇親会費〕5,000円（学生3,000円）

V. 会計からのお願い

下記のとおり2013年度分会費の納入をお願い申し上げます。払込票は先般お送りした支部

大会のお知らせに同封いたしました。寄付金についてもこちらの払込票をご利用ください。

〈郵便振替口座番号〉

加入者名：国際アーサー王学会日本支部

口座番号：00250-6-41865

年会費：3,000円

会 計：渡邊徳明

日本支部では、一口1,000円からの寄付金を随時募集いたしております。ご寄付を希望される方は、年会費払込票に「寄付〇口」とお書き添えの上、年会費とともにお支払い下さい。また大会会場でのご寄付も受け付けております。皆さまの温かいご支援をお願い申し上げます。

VI. 会員名簿に関するお願い

ご連絡先等の名簿記載事項に変更があった場合は、速やかに事務局までお知らせください。ただし実際に会員に配布される会員名簿に関し

ては、個人情報保護の観点からそれぞれの事項（所属・住所・電話／ファックス番号・メールアドレス）を掲載中止にすることも可能です。ご希望がございましたら事務局までお申し出ください。

なお、国際学会会誌の *Bibliographical Bulletin* については、名簿記載事項変更の届出が反映されるまでに一年かかります。悪しからずご了承ください。

VII. 研究発表・シンポジウム企画募集

日本支部では随時、支部大会での研究発表・シンポジウム企画を募集しております。ご希望・ご提案がございましたら事務局までお寄せください。シンポジウム企画は7月末、研究発表は9月末を締切のめどとし、時期に従って当該年度または次年度の大会に組み入れて参ります。

VIII. 文献情報

英文学（書誌担当：小宮真樹子）

〈中世英文学〉

『アングロ・サクソン年代記』（大沢一雄訳）、朝日出版社、2012年。

ロザリンド・カーヴェン『アーサー王伝説：7つの絵物語』（山本史郎訳）、原書房、2012年。

「古英語ロマンス *Apollonius of Tyre*」（唐澤一友訳）、『英米文学』（駒澤大学文学部英米文学科）、第46号、2011年、pp. 41-76.

ジェフリー・チョーサー『トロイルスとクリセイデ 付・アネリダとアルシーテ』（笹本長敬訳）、英宝社、2012年。

〈研究（単行本）〉

朝治啓三・渡辺節夫・加藤玄編『中世英仏関係史 1066-1500—ノルマン征服から百年戦争終結まで—』、創元社、2012年。

池上忠弘『14世紀のイギリス文学—歴史と文学の世界—』、中央大学人文科学研究所、2011年（人文研ブックレット26）。

桜井俊彰『イングランド王国と闘った男—ジェラルド・オブ・ウェールズの時代—』、吉川弘文館、2012年（歴史文化ライブラリー）。

地村彰之『チョーサーの英語の世界』、溪水社、2012年。

〈研究（雑誌・紀要論文等）〉

秋篠憲一「クレチアン・ド・トロワ作『荷車の騎士』の変容」、『同志社大学英語英文学研究』、第89号、2012年、pp. 1-38.

石坂恒「チョーサーの接頭辞 ‘un-’ で始まる語：Troilus and Criseyde の場合」、『關西大学文学論集』、第61巻3号、2011年、pp. 109-123.

海野昭史・西善也「マロリーの *Morte Darthur* 研究：アーサー王、ガウェイン、グィネヴィア、ランスロットの死をめぐる」、『朝日大学一般教育紀要』、第37号、2011年、pp. 45-54.

海老久人「チヨースーと英語ナショナリズム」、『神戸女子大学文学部紀要』、第45号、2012年、pp. 1-19.

岡本広毅「“trusteth wel, I am a southren man” : チヨースーと「荘園管理人の話」におけるイングランド北部」、『英米文学』(立教大学文学部英米文学専修)、第71号、2011年、pp. 35-61.

清川祥恵「民衆の聖堂 : ウィリアム・モリスの中世主義思想」、『ヴィクトリア朝文化研究』(日本ヴィクトリア朝文化研究学会)、第9号、2011年、pp. 44-57.

小林絢子「チヨースーの作品の中の植物とハーブについて」、『東京家政大学博物館紀要』、第17号、2012年、pp. 65-88.

鈴木詩織、「ケルト文化からみた『アーサー王物語』研究」、『Otsuma Review』(大妻女子大学)、第45号、2012年、pp. 109-116.

高木昌史「中世ヨーロッパの伝説(3)『ゲスタ・ロマノールム』」、『成城文芸』(成城大学文芸学部)、第218号、2012年、pp. 1-26.

田中久男「『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』の仕掛けと寓意 : パリンプセストとカーニヴァルの共演」、『マーク・トウェイン研究と批評』(日本マーク・トウェイン協会)、第10号、2011年、pp. 96-106.

田中逸郎「チヨースーの『カンタベリー物語』管見」、『尾道大学日本文学論叢』、第7号、2011年、pp. 1-4.

玉川明日美「The Reeve's Tale におけるチヨースーの演出的写実性」、『英米文学』(立教大学文学部英米文学専修)、第72号、2012年、pp. 127-157.

常木清夏「エドワード二世宮廷における男同士の絆——*Vita Edwardi Secundi* を中心に」、『ジェンダ-研究』(お茶の水女子大学ジェンダ-研究センター)、第14号、2011年、pp. 71-82.

十重田和由「チヨースーの『カンタベリー物語』における関係代名詞の用法」、『東洋大学人間科学総合研究所紀要』、第13号、2011年、pp. 35-44.

長谷川千春「*Sir Gawain and the Green Knight* における誓約と名誉——騎士としての理想と人間的弱さ」、『Tsurumi Review』(鶴見大学英語英文学会)、第41号、2011年、pp. 23-39.

林邦彦「*Saga af Tristram ok Ísodd* 再考」、『日本アイスランド学会会報』、第31号、2012年、pp. 1-23.

FUWA, Yuri. "The Editor at Work: Joseph Haslewood's Edition of Malory (1816).", *Mythes, Symboles et Images I*, Ed. Chiwaki Shinoda. Librairie Rakuro, 2011, pp. 59-68.

本田崇洋「「粉屋の話」と「荘園管理人の話」、「托鉢修道士の話」と「教会裁判所召喚吏の話」にみるチヨースーのコメディ」、『Oliva』(関東学院大学人文学会英語英米文学部会)、第18号、2011年、pp. 43-62.

向井毅・柴倉(田村)水幸・國崎倫他「W. シン版『チヨースー全集』(1532年)にみるテキスト領有——ヘンリソンの『クレシドの遺言』挿入と本文改稿」、『文芸と思想』(福岡女子大学文学部)、第75号、2011年、pp. 31-49.

〈その他〉

小林弘幸『おもしろすぎるアーサー王伝説』、文芸社、2012年

独文学 (書誌担当 : 林邦彦)

〈論文 (紀要論文等)〉

石井道子 現代文学の『レビヤタン』—文学におけるドラゴンの変容 早稲田大学創造理工学部社会文化領域人文社会科学研究会『人文社会科学研究』No. 52 (2012年3月) 37 - 53頁.

Eisaku Ishikawa (石川栄作) Tragische Helden im Nibelungenlied und in der Heike-Geschichte (『ニーベルンゲンの歌』と『平家物語』の比較研究 (IV) —悲劇の英雄たち— 徳島大学総合科学部『言語文化研究』第19巻 (2011年12月) 73 - 93頁.

一條麻美子 「愛の洞窟」の3つの窓—ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク『トリスタン』における名誉の問題— 西洋中世学会『西洋中世研究』第2号 (2010年12月) 83 - 98頁.

岩井方男 『ニーベルンゲンの歌』と祝宴 (1) 早稲田大学政治経済学部教養諸学研究会『教養諸学研究』第128号 (2010年3月) 1 - 34頁.

岩井方男 『ニーベルンゲンの歌』と祝宴 (2) 早稲田大学政治経済学部教養諸学研究会『教養諸学研究』第130号 (2011年3月) 1 - 16頁.

岩井方男 『ニーベルンゲンの歌』における「宮廷的なもの」(1) 早稲田大学政治経済学部教養諸学研究会『教養諸学研究』第131号 (2011年12月) 75 - 101頁.

尾野照治 ドイツ中世 (12, 13世紀) の tugend と untugend—Thomasin von Zerklære の Der Wälsche Gast に映るその諸相— 京都大学人間・環境学研究所ドイツ語部会『ドイツ文学研究』第55巻 (2010年3月) 1-35頁.

尾野照治 13世紀初期にイタリア人聖職者 Thomasin von Zerklære がドイツ人騎士たちに説いた徳操 state —「第二の書」による— 京都大学人間・環境学研究所ドイツ語部会『ドイツ文学研究』第57巻(2012年3月)1-23頁.

香田芳樹 美德の装い—ドイツ中世の教育文学におけるイメージとハビトゥス— 西洋中世学会『西洋中世研究』第3号(2011年12月)51-65頁.

清水 朗 Thomasin von Zirklære “Der Wälsche Gast” (イタリアの客人) についての一考察—中世の「イタリア人」が何故「ドイツ語」で詩作をしたのか— 一橋大学語学研究室『言語文化』第48巻(2011年12月)3-14頁.

土肥由美 受難劇 vs. 聖体祭劇—「イエス・キリストの受難」を巡る表現と受容に関する一考察— 西洋中世学会『西洋中世研究』第2号(2010年12月)62-82頁.

横山由広 日本のドイツ語・ドイツ文学専攻学生のための文献学志向の中高ドイツ語授業のすすめ ハルトマン『グレゴリウス』第835行を例に— 慶応義塾大学日吉紀要刊行委員会『慶応義塾大学日吉紀要—ドイツ語学・文学』第49号(2012年3月)227-257頁.

〈研究ノート〉

寺田龍男 中世ドイツ文学の発信型研究の試み—日本文化を出発点として— 北海道大学『メディア・コミュニケーション研究』第61号(2011年11月)169-184頁.

〈翻訳〉

林 邦彦 『王冠』(その三) ハイน์リヒ・フォン・デム・テュールリーン作— 早稲田大学大学院文学研究科ドイツ語ドイツ文学コース Angelus Novus 会『Angelus Novus』第39号(2012年3月)117-137頁.

仏文学(書誌担当:小沼義雄)

〈中世フランス文学作品、及びその周辺〉

ジョルジュ・ペギー『現代版フラメンカ物語』(谷口伊兵衛訳)、而立書房、2012年(アモルとプシュケ叢書).
マルコ・ポーロ『東方見聞録』(月村辰雄・久保田勝一訳)、岩波書店、2012年.

※ 『東方見聞録』は13世紀末の成立当初より人気を博し、数多くの写本が作られた。本書は、そのうち原初の形に近いとされる中世フランス語写本(フランス国立図書館蔵、fr.2810)より初めて直接翻訳がなされた『全訳マルコ・ポーロ東方見聞録』の待望の普及版である。写本に忠実な翻訳からアジアの驚異に対する当時の王侯貴族の驚きが伝わってくる(紹介文より).

フランソワ・ラブレー『ガルガンチュアとパンタグリュエル5—第五の書—』(宮下志朗訳)、筑摩書房、2012年(ちくま文庫).

『フランス民話集I』(金光仁三郎・福井千春・渡邊浩司・山辺雅彦訳)、中央大学出版部、2012年.

〈研究(単行本)〉

池上俊一『凶説・騎士の世界』、河出書房新社、2012年(ふくろうの本).

—『中世幻想世界への招待』、河出書房新社、2012年(河出文庫).

※ 同著者の『狼男伝説』、朝日新聞、1992年(朝日選書)の文庫版.

川那部和恵『ファルスの世界—15-16世紀フランスにおける「陽気な組合」の世俗劇—』、溪水社、2011年.

佐藤猛『百年戦争期フランス国制史研究—王権・諸侯国・高等法院—』、北海道大学出版会、2012年.

高橋薫『〈フランス〉の誕生—16世紀における心性のありかた—』、水声社、2012年.

※ 第4章「鹿の軛脚を王に捧げる—儀式とならなかった儀式—」で中世後期の狩猟文学を扱う.

田村毅・塩川徹也・西本晃二・鈴木雅生編『フランス文化辞典』、丸善出版、2012年.

甚野尚志・益田朋幸編『ヨーロッパ中世の時間意識』、知泉書館、2012年.

東浦弘樹『フランス恋愛文学をたのしむ—その誕生から現在まで—』、世界思想社、2012年.

※ 第一章でトリスタン物語を扱う.

徳井淑子『涙と眼の文化史—中世ヨーロッパの標章と恋愛思想—』、東信堂、2012年.

※ アーサー王物語の騎士の紋章、愛の悲しみを訴える叙情詩のレトリック、エンブレム・ブックの寓意等、中世から近世にかけて幾重にも重ねられた涙滴文の文学性と、それから浮き彫りになるヨーロッパの恋愛思想。涙と眼のモチーフをめぐる、雲と雨粒、ジョウロと水滴、さまざまな花々や動物たち、擬人化された心臓をはじめ、中世ヨーロッパの豊かな形象世界を通じ、人生の有為転変のなか、ひとが「泣くこと」の意味を問う(紹介文より).

堀越孝一『人間のヨーロッパ中世』、悠書館、2012年.

※ トルヴァドールからヴィヨンまで多くの中世フランスの文学作品を扱う.

水野尚『言葉の錬金術—ヴィヨン、ランボー、ネルヴァルと近代日本文学—』、笠間書院、2012年.

プレスイール (レオン) 『シトー会』 (杉崎泰一郎監修・遠藤ゆかり訳)、創元社、2012年 (「知の再発見」双書)。

モールバッハ (ベルンハルト) 『中世の音楽世界—テキスト、音、図像による新たな体験—』 (井本响二訳)、法政大学出版局、2012年。

ルゴフ (ジャック)、ジャンナン (ピエール)、ソブール (アルベール)、メトラ (クロード) 『フランス文化史』 (桐村泰次訳)、論創社、2012年。

〈研究 (雑誌・紀要論文等)〉

大高順雄 「ヨハネの黙示録—注解の系譜—」、『大手前大学論集』、第12号、2011年、pp. 311-326。

篠田勝英 「中世の作品を読む—故きを温ね、新しきを...—」、海老根龍介・福田耕助編 『白百合で学ぶフランス文学』、弘学社、2011年、pp. 31-49。

瀬戸直彦 「人生の四時期—オジル・デ・カダルスとフィリップ・ド・ノヴァールの場合—」、甚野尚志・益田朋幸編 『ヨーロッパ中世の時間意識』、知泉書館、2012年、pp. 143-165。

Naohiko SETO, 《Le vocabulaire féodal dans Gaucelm Faidit : sur “jove senhoratge” (PC 167, 52, v. 43) 》, Angelica RIEGER (éd.), *L'Occitanie invitée de l'Euregio. Liège 1981 - Aix-la-Chapelle 2008, Bilan et perspectives. Actes du neuvième Congrès International de l'AIEO, Aix-la-Chapelle, 24-31 août 2008*, Aachen, Shaker, 2011, pp. 519-531.

田辺めぐみ 「装飾の位相—『マルグリット・ドルレアンの時祷書』の余白装飾」、『Stella』 (九州大学フランス語フランス文学研究会)、第30号、2011年、pp. 85-98。

—「『マルグリット・ドルレアンの時祷書』 (BnF. ms. lat. 1156B) における植物装飾の創意源泉考察」、『鹿島美術財団年報』、第28号別冊、2011年、pp. 481-489。

Megumi TANABE, 《Une nouvelle réflexion sur le style de l'ornement végétal dans les livres d'heures bretons au XV^e siècle 》, Chantal CONNOCHIE-BOURGNE et Sébastien DOUCHET (éd.), *Effets de Style au Moyen-Âge*, Aix-en-Provence, Publications de l'Université de Provence, 2012 (Senefiance. 58), pp. 255-262.

傳田久仁子 「待ち望まれた子供—十二、三世紀のレにおける不妊—」、『関西フランス語フランス文学』、第17号、2011年、pp. 3-14。

徳井淑子 「(解説) 衣服の歴史人類学に向けて」、アルフレッド・フラン克蘭 『パリの私生活』 (Part 1 : 服飾と「消費文化」別冊)、アティーナ・プレス、2012年。

細川哲士 「ある農学者の話—オリヴィエ・ド・セールの場合—」、『現代文学』、第84号、2011年、pp. 91-102。

Takeshi MATSUMURA, 《Sur la version P de *la Chanson de Roland* : remarques lexicographiques 》, Stephen DÖRR et Thomas STÄDTLER (éd.), *Ki bien voldreit raisun entendre. Mélanges en l'honneur du 70^e anniversaire de Frankwalt Möhren*, Strasbourg, Editions de linguistique et de philologie, 2012, pp. 185-190.

横山安由美 「書かれざるテキスト—アンジェの黙示録タピスリーにおける無文字の「吹き流し」について—」、『西洋中世研究』、第3号、2011年、pp. 66-85。

〈翻訳〉

ヴァルテール (フィリップ) 『『聖杯の書』または13世紀散文「聖杯物語群」の誕生—ボン大学図書館526番写本をめぐって—』 (渡邊浩司訳)、『仏語仏文学研究』 (中央大学仏語仏文学研究会)、第44号、2012年、pp. 211-234。

—「シャルルマーニュと妹の近親相姦—中世史に残る「噂」をめぐる解釈学試論—」 (渡邊浩司訳)、『仏語仏文学研究』 (中央大学仏語仏文学研究会)、第44号、2012年、pp. 191-210。

イタリア、スペイン、カタルーニャ文学 (書誌担当: 小沼義雄)

ダンテ 『新生』 (平川祐弘訳)、河出書房新社、2012年。

ボッカッチョ 『デカメロン』 (平川祐弘訳)、河出書房新社、2012年。

平川祐弘 『中世の四季—ダンテ『神曲』とその周辺—』、河出書房新社、2012年 (KAWADE ルネサンス)。

※ 復刻新版 (初版は1981年)。

日伊協会監修、西本晃二・英正道編 『イタリア文化辞典』、丸善出版、2011年。

セルバンテス文化センター東京監修、川成洋・坂東省次編 『スペイン文化辞典』、丸善出版、2011年。

中世ラテン文学 (書誌担当: 小沼義雄)

『中世の説教』(高柳俊一編)、教文館、2012年(シリーズ・世界の説教).
岡崎敦「アベラールの語り、エロイーズの声」、岡崎敦・岡野潔編『テキストの誘惑—フィロロジの射程—』、九州大学出版会、2012年(九州大学文学部人文学入門4)、pp. 211-227.
ドロンケ(ピーター)『中世ラテンとヨーロッパ恋愛抒情詩の起源』(瀬谷幸男監訳・和治元義博訳)、論創社、2012年.

※ 南仏プロヴァンスのトルバドゥールは、古典古代のギリシア・ローマとは極めて異質な、西欧的恋愛の原型たる「宮廷風恋愛」の観念を創めて謳ったとされる。しかし、著者は本書の中で「宮廷風体験」“courtly experience”という新たな概念の基準を導入して、エジプト、ビザンティウム、グルジア、イスラム、モサラベ・スペイン、英・仏・伊・独、アイスランド、ギリシア語圏、南イタリア等々の時空を越え、読者(聴衆)階層の異なる多彩な形式の詩作品群から豊富な例を援用して、「宮廷風恋愛」の意味と起源に関し、従来の定説に博引旁証の実証的論拠を展開し反証を企てる(紹介文より).

ケルト文学(書誌担当:小沼義雄)

原聖編『ケルト諸語文化の復興』、三元社、2012年(ことばと社会・別冊4).
松島駿二郎『ケルト物語—絡み合う周縁からの視線、ケルトと日本—』、彩流社、2012年.

その他(書誌担当:小沼義雄)

ムヒタル・ゴッシュ、ヴァルダン・アイゲクツィ『中世アルメニア寓話集』(谷口伊兵衛訳)、溪水社、2012年.

編集・発行

国際アーサー王学会日本支部事務局
6078194 京都市山科区大宅棧敷 2-123
嶋崎陽一

Tel. & Fax. : 075-591-7471

E-mail : shimazaki@me.com

メンバー・リスト :

members@ml.arthuriana.jp

(新規登録・アドレス変更は事務局まで)

学会ウェブサイト :

<http://www.arthuriana.jp/>